学べるゲラ

第126回
いくこう　目標へ前向き

※2026年1月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

フィギュアスケートのアイスダンスで結成1季目の櫛田育良選手（木下アカデミー）島田高志郎選手（同）組が、毎日新聞の取材に応じた。「飛躍」と位置づけた今季を振り返るとともに、来季のテーマを「挑戦」に設定。全日本選手権優勝と来年の4大陸選手権や世界選手権出場を目標に掲げた。

「今までの人生を振り返っても一番だったと言えるぐらい、濃い毎日を過ごしていたなと思いますし、早かったなと。その中で、たくさんの新しい経験を2人で積むことができたので、すごくいいスタートを切れたと思います」

充実の表情で男子シングルから転向した島田選手が充実の表情で振り返ると、今季は女子シングルとの「二刀流」で活動してきた櫛田選手も続いた。

「結成してから、アイスダンス、シングルの両方を練習して毎日忙しいスケジュールでした。本当に充実していたなって思うのと、やっぱり大変だったなと思う部分がありました。でも、一番は楽しかったです」

競技会のデビュー戦となったのは、昨年9月に長野県軽井沢市で開催された「クリス・リード杯」。2人が指導を受けるキャシー・リード・コーチの弟クリスさん（30歳で死去）を忍び設立された、縁ある大会だった。リズムダンス（RD）のみの大会だったが、いきなり62・01点をマークした。

続く11月の全日本予選会は、R

Ｄで点数を更に伸ばすと、フリーも92・02点の合計１５９・21点で優勝。オリンピックや世界選手権といった国際大会に出場するための最低技術点（ミニマムスコア）を取得するため、「いくこう」としては初の国際大会となるゴールデンスピン（昨年12月、クロアチア・ザグレブ）への派遣をつかみ取った。

残念ながらミニマムスコアの取得にはわずか1・56点及ばなかったが、帰国後に出場した全日本選手権は１００・76点と初めて１００点台に乗せて2位。島田選手によれば、結成前は手探りだったという状態から、すさまじい成長ぶりを見せた。

「自分の中で何かしら目標は絶対に必要だろうなって思っていました。まずは全日本選手権の表彰台に争点を当てて、４大陸選手権の出場などは、シーズンの中盤ぐらいからどんどん明確な目標になってきた感じです。まさかここまでいろんな経験ができるとは思っていなかったです」

その思いは櫛田選手も一緒だった。「1期目でどこまでいくか、全然わからなかった。こうなりたいなという願望はうっすらあったんですけど。本当に想像ができず、とにかくできるところまでやってみようというのが一番でした」

もちろん、2人にとって国際大会でミニマムスコアが取得できなかった点については悔いが残る。届いていれば、ミラノ・コルティィナ冬季五輪代表争いに加われたことはもちろん、４大陸大会や世界選手権といったシーズン後半の主要国際大会への派遣も可能性が出てきたからだ。櫛田選手は「悔しかったです」と素直な気持ちを口にした後、「でも」と続けた。

「そこで課題が明確になったこともあって、すごくいい試合だったなって。もっともっと頑張っていかないと、トップを目指していくには足りないなと思いました」

男子シングルス時代にさまざまな国際舞台を経験してきた島田選

手も、アイスダンサーとして世界との距離を知ったという。

「甘くないぞ、という現実を突きつけてくれた試合でしたし、今季の4大陸選手権派遣を逃したという悲しさもありました。練習の成果がそのまま理想の結果となって返ってこなかったので、悔しさはもちろんあったんですけど……」

それでも今は、前向きに捉える。「これが足りないよね』『ここに向けて頑張ろうね』と思えているので、すごくいい機会になったと思います」

櫛田選手は男子シングルから転向して間もなく、島田選手は女子シングルとの「二刀流」という状況で駆け抜けたシーズン。結成1季目としては及第点の成績にも映る。だが、島田選手は「そこはそう考えていません」と否定した。

「新しく組んだ別のペアがすぐにミニマムを取っていたりもしますし。もちろんミニマムのハードルは高いと感じます。でも当たり前のようにクリアしないといけない世界だなと思っているので」

2人にとって今季は「挑戦」と位置づけていたという。「結成間もなかったので、演技でもフレッシュさを出せた」と島田選手。「来季はその助けがないとなると……」と言うと、櫛田選手が言葉を取るように続けた。「今季よりも、もっと頑張らないといけない」

そんな「いくこう」が来季のテーマとして掲げたのは「飛躍」。「今季以上に頑張らないと、新たなフレッシュさは出てこない。2年目の方が大変……いや、これからもずっと大変だとは思うんですけど。大変だと感じるポイントがちょっとづつ変わってくると思うので。来季は『飛躍』を掲げ、それを意識してやっていきたいです」

アイスダンスのカップルを結成したことで、スケートの見え方も変わってきたという2人。「いくこう」の呼び名はだいぶ定着してきた。見る者の記憶に残るような世界感あふれる滑りを、2人で更に目指していく。